

白石第二小学校 分散授業の取り組み

本年2～3月、白石第二小学校では新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてタブレット端末を活用して、教室内の密を避ける取り組みを実施しました。

4年生以上の学年は、クラス内を2つのグループに分け、1つのグループは午前中に登校し給食後に下校し、自宅でオンライン授業。もう1つのグループは午前中は自宅でオンライン授業、午後に登校し給食後に教室で授業を実施。3年生以下の学年は、空き教室などを活用してクラスを2つに分け、一方のクラスは対面による授業、もう一方のクラスはタブレット端末を使用してオンラインによる授業を実施しました。対面授業とオンライン授業それぞれの一体感がある授業を目指して、オンライン授業を受けている児童にも指名するなど工夫しながら授業を行いました。



- 1_分かれたクラスでオンライン授業を受ける3年生
- 2_5年生クラスの様子、密を避けるため半数が登校
- 3_半数は自宅からオンライン授業を受講

小原学園 海外の学校とオンライン交流

本年3月に、小原学園では小学5・6年生および中学1年生がシンガポールの日本人学校「チャンギ校」とオンラインによる「自然と地域を学ぶ学習」を実施しました。

交流前に各学校で学校紹介の動画を作成。交流当日はその動画の感想や疑問点をお互いが質問しました。小原学園の児童・生徒は、シンガポールの気候や自生している植物などの質問を行い、チャンギ校の児童からは、材木岩の名前の由来や、日本の四季について質問がありました。ICTを活用することで、遠く離れた外国の学校と交流できたり、少人数の学校でも多くの同年代の児童と交流したりすることができました。



- 1_「チャンギ校」からは6年生児童が参加しました
- 2_オンラインでチャンギ校に質問をする小原学園の児童
- 3_感染症対策として小原学園は各学年をオンラインでつないでそれぞれの教室で交流を行いました



ICTは、日本語で情報通信技術を意味し、インターネットなど通信技術を使って人同士が繋がる技術を指します。広報3月号でお知らせしましたが、本市のICT教育が日経BPが実施した「公立学校情報化ランキング」で高い評価を受けました。今月号では、学校の取り組み事例についてお知らせします。

大きく変わる「学び」のかたち

感染が急拡大 突然の臨時休業

令和2年2月、新型コロナウイルスの感染が急拡大し、国からの要請を受けて市内の小・中学校は一斉休校を余儀なくされました。それから学校が再開された6月まで、約3カ月間子どもたちの学びに大きな制約が生じてしまいました。学校の臨時休業、不要不急の外出自粛が続く、これまで当たり前だった学校に集まる集団生活による「学び」が、新型コロナウイルス感染症を契機として、これまでとは違った形の実施を検討しなければならなくなりました。

学校の現場のICT導入

本市では、国が進めるGIGAスクール構想事業を活用し、令和2年度に市内全小・中学校児童生徒に学習用1人1台タブレット端末とオンラインで利用できる環境を整備し、学校現場のICT化を早

期に進めてきました。そのため、臨時休業などの緊急時にも学校とのやり取りが行えるようになっていきます。

新たな学びのかたちへ

1人1台タブレット端末を授業に活用することで、自宅からオンラインで授業に参加することができ、タブレット端末で行うドリルでは、授業の進捗状況に応じて問題の配信、回答状況も常に確認できます。

また、直接出向くことが難しい遠くの地域の学校と交流をするなどオンラインを活用することで「学びのかたち」が大きく変わっています。

タブレット端末を持つことによって、ICTを活用した新たな学びが進みますが、今後もタブレット端末を活用しながらも、従来の対面による授業や、ノートを使うこれまでの学習も継続し、全ての児童・生徒に質の高い学びを実現していきます。